書　評

リベラルな国際主義の可能性

――G・ジョン・アイケンベリー（岩﨑良行訳）『民主主義にとって安全な世界とは何か――国際主義と秩序の危機』（西村書店，2021 年）――

藤木　剛康

【1】はじめに

本書の著者であるG・ジョン・アイケンベリー（G. John Ikenberry）は長年，ポスト冷戦期のアメリカ外交やアメリカ主導のリベラルな国際秩序を正当化する議論を提起してきた代表的な研究者であり，オバマおよびバイデン政権の主要な外交イデオローグの一人でもある。本書は今日におけるリベラルな国際秩序の危機に対し，危機の原因や背景を理解し秩序を再建する展望を考察するために書かれたものであるが，秩序そのものではなく，それを創り出した政治思想であるリベラルな国際主義に焦点を当て，それは「歴史の終わり」をめざす思想ではなく，「自由民主主義を「安全なもの」にすることをめざす，実践的で臨機応変かつ改革志向の取り組み[1)]」であり，それ自体が様々な理念や運動の集合体であり，また，多様な政治理念や運動と結びつき，その歴史的役割を果たしてきたとする。

以上のように，本書の意図はリベラリズムの擁護にあるが，議論の特徴はリベラルな制度ではなくリベラルな政治思想に焦点を当てたことにある。執筆の動機はフランシス・フクヤマのリベラルな政治秩序論[2)]と同じだが，リベラルな政治秩序を擁護しつつもその成立の偶然性や歴史的経路依存性を強調せざるを得なかったフクヤマに対し，アイケンベリーはリベラルな国際主義の「不明確かつ変幻自在な特性[3)]」や「失敗する能力[4)]」を強調している。つまり，制度ではなく思想という曖昧なものに焦点を当てることで，一見するとより頑健なリベラリズム擁護論を主張できるようになっている。では，政治思想の検討を通じたアメリカ外交やリベラルな国際秩序の擁護論にはどのような意義や問題点があるのだろうか。本稿では以上の議論を念頭に，以下の【2】から【5】では本書の主要な論点を検討し，【6】では本書に対する論点を提起し，議論を進めていく。結論を若干先取りすると，本書および本書をめぐる議論にも，ア

1）　G・ジョン・アイケンベリー『民主主義にとって安全な世界とは何か』12ページ。
2）　フランシス・フクヤマ（会田弘継訳）『政治の起源――人類以前からフランス革命まで』講談社，2013 年，フランシス・フクヤマ（会田弘継訳）『政治の衰退――フランス革命から民主主義の未来へ』講談社，2018 年。
3）　アイケンベリー前掲書，29ページ。
4）　G. John Ikenberry, “Why American Power Endures,” *Foreign Affairs*, November/December 2022

メリカ外交やその理念の長所と短所の両方を観察できるであろう。

【2】リベラルな国際主義とは何か

アイケンベリーによれば，リベラルな国際主義とは自由民主主義諸国からなる世界を組織するための一連の着想と事業構想であり，その理念の柱は①国際的開放性，②多国間主義とルールに基づく関係，③民主的連帯と協調的安全保障，④進歩主義的な社会目的，の4つである。それは，近代性，すなわち，科学，技術，産業主義の力によって解き放たれた国内および国際社会における大規模で世界的な一連の変容の生み出す諸問題にいかに対処するのかという問題に取り組んできた。

したがって，体系的で一貫性のある教義のようなものではなく，その時々の問題に取り組む融通無碍な政治的理念や運動として捉えるべきであるとする。例えば，他の政治思想との関係では，その構想を実現する過程でナショナリズム，帝国主義，ウェストファリア型国際主義，英米覇権など常に他の構想と結びつくこともあった。また，その内部には通商国際主義，国際平和運動，法的国際主義，社会国際主義，機能的国際主義などの諸潮流が存在し，19世紀終わりごろにリベラルな国際主義として緩やかに結びつくようになったとする。

【3】ウィルソンの国際主義とルーズベルトの国際主義

アイケンベリーは，リベラルな国際主義の歴史の中でもウィルソンとルーズベルトの下に結集し，独自の国際秩序を実現するまでに至った運動を「ウィルソンの国際主義」,「ルーズベルトの国際主義」と呼び，それぞれが実現した「ウィルソンの秩序」と「ルーズベルトの秩序」とを対比している。

ウィルソンの国際主義とは，多国間主義と国際的な規範やルールによって集団的安全保障と自由貿易を実現しようとする一方で，帝国や人種的・文化的ヒエラルキーの問題を放置した。戦間期に実現したウィルソンの秩序の特徴は，世論と道徳的説得による非拘束的な合意，中身の薄い制度的義務を基礎としており，善意の諸国家による国際主義にすぎなかった。

これに対し，ルーズベルトの国際主義は，近代性それ自体の危機，すなわち大恐慌と全体主義国家の台頭という危機に対し，進歩的な社会的目標と国内外での国家の介入，人種主義や文化主義の放棄，大国間の安定した協調の必要性によって対処しようとした。第2次大戦後に実現したルーズベルトの秩序では，より包括的で安定した地政学的基盤の必要性が強調され，国家間協力を促す制度・環境に焦点が当てられていたとする。

【4】冷戦期の「内部」秩序とポスト冷戦の「外部」秩序

また，アイケンベリーはリベラルな国際主義による第２次大戦後の国際秩序は，冷戦期の内部秩序として形成され，ソ連圏の解体によってポスト冷戦期には外部秩序に拡大したと考えている。

冷戦期の国際秩序は，ソ連の封じ込めと自由主義世界の再編成および防衛という２つの構想によって形成された。ゆえに，冷戦期のリベラルな秩序は米ソ二極システムの内部秩序であり，それは自由主義国家間での安全保障および政治的な駆け引きを許容することで，秩序を維持するための負担や責任の適切な分担を実現したとする。

他方，ポスト冷戦期の秩序は，冷戦期の内部秩序がグローバルな外部秩序として拡大したもので，そこには非自由主義諸国も統合された。しかし，自由主義国と非自由主義国との間での安全保障および政治的駆け引きは困難であり，その結果，リベラルな秩序のルールや制度の断片化，秩序による国際的な統合力の弱体化が進んだ。さらに，自由主義諸国においても経済不安や不平等が進行したことも，リベラルな国際秩序の統合力を弱めた。アイケンベリーは，今日のリベラルな国際秩序の危機は，成功による危機，すなわち，権力政治の復活や無政府状態による「カー的危機」ではなく，近代性のもたらす諸問題による「ポラニー的危機」であるとする。

【5】リベラルな国際主義の展望

アイケンベリーは，リベラルな国際主義の再建のための課題を列挙して本書を締めくくっている。再建のための主な課題は，①貿易のもたらす効率と社会的安定とのジレンマの解消，②主権と介入主義，すなわち，内政不干渉重視の防御型自由主義と社会の再編を伴う攻撃型自由主義の均衡をいかに実現するのか，③クラブと開かれたシステム，すなわち，秩序の内と外との適切な境界の再構築，④非自由主義世界との関係をいかに調整するのか，⑤アメリカによる覇権と権力をいかに抑制するのか，⑥リベラルな国際主義を導く近代性の物語をどのようにして仕立て直すのか。

また，リベラルな国際主義を支えた多様な国際主義のまとまり――自由貿易，社会民主主義，国家安全保障，多国間主義，民主的連帯，覇権的リーダーシップ――の連合体が崩壊してしまったが，今日の課題はこの連合体を再建することだとする。

【6】論　　点

本書の意義は，リベラルな国際秩序を直接に擁護するのではなく，それを形成した理念であ

るリベラルな国際主義を「近代性に対処するための試行錯誤を含む構想」として再定義し，その歴史的経緯と思想的系譜を包括的に検討し，リベラルな国際秩序が形成された歴史的・思想的背景を明らかにすることを通じて，その再建に向けた構想を提示しようとしたことである。リベラルな国際秩序そのものではなく，秩序の背景にある理念に焦点を当てることで，一見，より強靱なリベラリズム擁護論になっているが，リベラリズムそれ自体のはらむ問題については十分に検討されていないという問題点も有している。以下，①リベラルな国際主義をめぐる論争，②バイデン政権の外交政策との関係，という２つの論点に即して議論を進めていく。

【6-1】リベラルな国際主義をめぐる論争

ここではまず，*International Security* 誌の43巻４号の「リベラルな国際秩序はどこへ（Whither the Liberal International Order?）」と題された特集に寄せられた現実主義の研究者によるリベラルな国際秩序批判を検討した上でアイケンベリーの議論と比較し，アイケンベリーの議論の問題点を検討する。

まず，チャールス・グレイサー（Charles L. Glaser）の議論を検討しよう[5)]。グレイサーによれば，リベラルな国際秩序という概念はそれを不変の前提ないしは実体とみなすことで，より適切な外交政策を選択できなくなる危険性がある。つまり，リベラルな国際秩序論は参加国間の関係のみに当てはまる内向きで現状維持バイアスのかかった議論である。また，民主主義，階層性，制度的拘束，経済的相互依存，政治的収斂というリベラルな国際秩序論の５つの構成要素のうち，階層性と制度的拘束，政治的収斂は理論的に問題がある。リベラルな国際秩序は中国やロシアに対して権威たりえておらず（階層性を尊重しておらず），大国は重要な国益については制度的拘束に従わないし，民主主義への収斂も進んでいない。さらに，これらの構成要素はそれ以上のものにはならないし，しばしば要素間での矛盾が生じる。例えば，経済的相互依存は中国やロシアのパワーを増大させ，階層性を弱体化した。そして，直面する問題，とりわけ権威主義体制それ自体を秩序に対する脅威として過大評価し，過度の反発を招く危険な現状維持バイアスがあるとする。よって，グレイサーはリベラルな国際秩序もアメリカの死活的利益を実現するための大戦略の手段に過ぎないとして，アメリカの外交政策における位置づけを見直すよう主張する。

次に，もう一人の代表的な現実主義者であるジョン・ミアシャイマー（John Mearsheimer）の議論を検討する[6)]。ミアシャイマーによれば，国際秩序とは参加国間の相互作用を統治するための国際制度の組織化されたグループであり，下位の分類として，全ての国家を含む国際秩

5）　Charles L. Glaser, “A Flawed Framework: Why the Liberal International Order Concept Is Misguided,” *International Security*, 43: 4, 2019

6）　John Mearsheimer, “Bound to Fail: The Rise and Fall of the Liberal International Order,” *International Security*, 43:4, 2019

序と一部のメンバーからなる境界のある秩序との区別，また，秩序そのものの性格から，大国が組織する現実主義秩序，単極がその普遍的イデオロギーを輸出するイデオロギー秩序，価値観を押しつけない不可知論秩序の３つに区別される。秩序の３類型のうち，単極による価値観の押しつけは様々な問題を生み出すため，イデオロギー秩序は失敗する運命にある。歴史的にみれば，冷戦期には米ソ協力のための薄い秩序と米ソそれぞれが支配する２つの境界のある現実主義秩序が存在したが，ソ連の解体で西側の現実主義秩序がリベラルな国際秩序に転換し，参加国と開放的国際経済，自由民主主義の拡大をめざすようになった。しかし，自由民主主義の輸出は困難に直面し，開放的国際経済は民主主義国の経済的格差を拡大してナショナリズムの台頭を招き，対外的には中国やロシアの台頭を促した。ゆえに，ミアシャイマーは，冷戦期のような薄い国際秩序と，米中それぞれが主導する２つの厚い境界のある現実主義秩序の共存という世界を展望している。

以上で検討したように，実は，現実主義者であるグレイサーおよびミアシャイマーと，リベラリストであるアイケンベリーのリベラルな国際秩序についての評価は驚くほど似ている。第一に，これら３人は共通して，自由主義国と非自由主義国との深い統合や秩序維持のための政治的調整は困難であると考えている。第二に，開放的な国際経済は自由民主主義国内部での経済的不平等を生み出すため，持続困難であるとみている点でも３人は共通している。アイケンベリーによれば，現実主義者はリベラルな国際主義の失敗を，カー的危機，すなわち，世界政治における無政府性によるものとみているはずである[7)]。しかし，とりわけミアシャイマーは開放的な国際経済による経済格差の拡大という問題を指摘しており，「現実主義者のカー的危機，リベラリストのポラニー的危機」という二分法は必ずしも当てはまらない。第三に，ポスト冷戦期のリベラルな国際秩序の見直し，とりわけ非自由主義諸国との境界線の引き直しが必要だと考えている点でも三者は共通している。

では，現実主義者とアイケンベリーとの違いはどこにあるのだろうか。それは，グレイサーの指摘するように，自由主義的国際主義はそれ自体が歴史を動かす実体であり政治の目的であるとするのか，アメリカの国益を実現する手段に過ぎないのか，という点にある。したがって危機の処方箋として，アイケンベリーはリベラルな国際主義を支持する国内政治連合の再建を提起するのに対し，現実主義者は外交エリートの大戦略の見直しを主張する。

したがって，アイケンベリーはグレイサーやミアシャイマーら現実主義者の議論の妥当性を認めたうえで，擁護の対象をリベラルな国際秩序という制度からリベラルな国際主義という理念に移し替えることで，彼らの批判をすり抜けようとしているとはいえないだろうか。例えば，一般にはリベラルな国際主義の失敗だとされるイラク戦争も，アイケンベリーによれば，戦争を企てたラムズフェルド，チェイニー，ウォルフォウィッツにとって「戦争のおもな目的は，

7)　アイケンベリー前掲書，43ページ。

国益にとって重要な地域におけるアメリカの優位性の維持と拡大だった。…平たく言えば，ブッシュ政権の対イラク政策はあきらかに現実主義的だった[8)]」ということになる。つまり，イラク戦争はリベラルな国際主義の過ちではなく，それと結びついた現実主義者の過ちであったということになる。

また，グレイサーやミアシャイマーの指摘するリベラルな国際主義の不寛容性や自己破壊に至る拡大傾向については，「この批判は…リベラルな理念によって定義される価値観のシステム内でのみ意味をなす[9)]」として退け，リベラルな国際主義は過ちを認め試行錯誤を続けるプラグマティズムであるとする。しかし，今日，これらの批判は現実主義者だけではなく，リベラリズムに反発する国内のポピュリズム，国外では中国やロシア，さらにはグローバル・サウスの国々からも寄せられるようになっており，アイケンベリーの反論は視野が狭いのではないか。そこで，次に，国際政治学者による代表的なリベラリズム批判を検討する。

まず，マイケル・デッシュ（Michael Desch）によるリベラリズム批判をまとめておく[10)]。デッシュによれば，アメリカのリベラリズムは非リベラリズムである。すなわち，アメリカ的リベラリズムの伝統では，リベラリズムは非リベラルな世界では生き残れないと考える。それは，非リベラルの脅威を過大評価し，リベラルを拡大する困難を過小評価する。ゆえに，脅威を封じ込めてそれとの共存をめざすよりは，脅威を根絶するために覇権を追求し，予防戦争を選択し，国内では市民的自由を制限するなどの非リベラルな政策を選好しがちである。したがって，アメリカ的リベラリズムは実は非リベラリズムであり，世界を変えられない場合は孤立主義，変えられる場合はメシア主義という両極に大きく振れる。デッシュは，アメリカはこうした極端な外交政策に代えて，国内ではリベラリズム，対外的には現実主義を採用すべきであるとする。

また，とりわけポスト冷戦期のリベラリズムには，経済的な新自由主義あるいは経済・技術万能論という潮流が合流している。この点について中西は，過去30年でリベラリズムはなぜその優位を失い，権威主義への後退を重ねるようになったかという問いを立て，それは手段的技術論の支配に対する非合理主義の反発が一因であるとする。そして，「社会秩序を単一の理性と技術的手段で構成可能とする教条的自由主義に堕した新自由主義を克服し，複数の共約可能な価値の両立を図るためには「大きな物語」が必要である[11)]」と述べている。

アイケンベリーは，リベラルな国際主義は常に他の政治潮流と結びつき，臨機応変にその歴史的役割を果たしてきたと述べるが，これらの批判を踏まえれば，実は他の政治潮流と結びつ

8） アイケンベリー前掲書，293～294ページ。

9） アイケンベリー前掲書，46ページ。

10） Michael Desch, “America’s Liberal Illiberalism: The Ideological Origins of Overreaction in U.S. Foreign Policy,” *International Security*, 32:3, 2007/08

11） 中西寛「「大きな物語」なき時代の戦争と21世紀の平和の条件」『アステイオン』97，2022年。

くことでその不寛容性や自己破壊的衝動を中和する必要もあったとも言えるのではないか。そもそも，ポラニー自身は19世紀文明の歴史は自己調整的市場ないしは経済的自由主義の破壊的作用と，それに抗して人間や社会を守ろうとする多様な社会運動との相互作用であったと考えている[12)]。アイケンベリーは，リベラルな国際主義は近代性への対応策だとしているが，他方で，その理念には国際的開放性や自由貿易主義が含まれるとも述べている。後者の側面から考えると，リベラルな国際主義はそもそもポラニー的危機の種子を内在しているとも考えられないだろうか。

まとめよう。アイケンベリーのリベラリズム擁護論は，政治思想としてのリベラリズムの曖昧さや融通無碍な性格を強調しつつ，リベラリズムそれ自体の不寛容性や自己破壊性を軽視するという問題点を持つ。ゆえにアイケンベリーの議論には曖昧さに由来する強靱さと，リベラリズム批判の軽視という問題点とが併存している。【6-2】では，この両側面がバイデン政権の外交政策をめぐる議論とどのように関係しているのかについて検討する。

【6-2】ルーズベルト的秩序への回帰は可能か――バイデン政権の中間層外交の評価をめぐって

冒頭でも述べたように，アイケンベリーはバイデン政権のイデオローグとしての顔も持ち，ゆえに本書の議論はバイデン政権の中間層外交の知的基盤を提供するものでもある[13)]。アイケンベリーとバイデン政権はともに，リベラルな国際主義を「失敗を許容する取り組み」であると再定義し，それを支持する政治連合を再構築しつつ，リベラルな国際主義を再建すべきであると主張する点で共通している。以下で検討しよう。

バイデン政権の国家安全保障問題担当大統領補佐官であるジェイク・サリバンは，2016年大統領選でのトランプの勝利に衝撃を受け，それまでの民主党の外交政策の抜本的な見直しを始めた。サリバンによれば，トランプの勝利の背景には，イノベーションやグローバル化の進展による経済格差とアイデンティティ政治の深刻化があった[14)]。しかし，アメリカの外交専門家はこれらの問題を軽視した結果，トランプの唱えるアメリカ第一主義による批判を受けることになった。こうした事態を受けてサリバンは，アメリカ外交の理念とは「アメリカ的価値観の拡大」ではなく，自らの失敗や欠点に対する自己評価と自己修正，自己革新であると述べる[15)]。

以上のような反省に立ち，サリバンを始めとする民主党の外交専門家は，経済社会と（リベラルな国際主義を支持する）中間層の再建を進めつつ，中国との長期的な体制間競争に備える

12） カール・ポラニー『大転換――市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社，2009年。

13） Michael Hirsh, “Why Liberal Internationalism Is Still Indispensable — and Fixable,” *Foreign Policy*, December 5, 2020

14） Jake Sullivan, “The New Old Democrats,” *Democracy: A Journal of Ideas*, June 20, 2018

15） Jake Sullivan, “What Donald Trump and Dick Cheney Got Wrong About America,” *The Atlantic*, December 14, 2018

中間層外交を提起した。民主党の外交専門家によれば，①ポスト冷戦期のグローバルビジネス志向の外交，②工場労働者優先のアメリカ第一主義，③環境問題優先の社会的リベラルの外交のいずれもが，広範な中間層の利益を代表する外交政策たりえない[16)]。

こうした議論の組み立ては，アイケンベリーの議論とも共通している。アイケンベリーは，バイデンの進める政治革命の知的基盤はルーズベルトにあるとし，バイデンはルーズベルトのように政治連合を構築し，自由主義的覇権の基礎を再構築すべきであるとする[17)]。ルーズベルトは大恐慌や全体主義国家の台頭などの近代性の生み出す問題に対し，国内の政策・制度革新と自由世界連合の形成とを結びつけてリベラリズムを擁護した。

ただし，中間層外交論でもアイケンベリーの議論でも，今日の政治状況において，リベラルな国際主義がどのような政治理念や運動と結びつく必要があるのか，また，その内部にどのような分派を抱えており，それらの分派の再結集のためには何が必要であるのかといった政治戦略についてはあまり議論されていない[18)]。中間層外交論では，①グローバル化志向の外交，②アメリカ第一主義，③社会的リベラルの外交，という既存の３つの外交路線よりも広範な支持を得られる路線として中間層外交を位置づけているが，これら３つの路線にどのようにアプローチして多数派を構築するのかという点についてはほとんど議論されていない。他方，アイケンベリーの議論では，リベラルな国際主義の批判者として現実主義者と修正主義の議論が検討されている[19)]。しかし，これらの議論は国内政治のアクターというよりは，アカデミックの世界におけるアイケンベリーの批判者にすぎないのではないか。

中間層外交に対しては，工場労働者のための保護主義的政策にすぎないのではないかという厳しい批判も寄せられている[20)]。また，動きの激しい政治の世界では，構築すべき政治連合の青写真を描いてから行動するのは困難で，その時々の情勢を臨機応変に判断し，後付けで正当化するしかないのかもしれない[21)]。第二に，かつてのルーズベルト連合のような堅固で広範な政治連合を再建する展望はあるのか，という問題もある。というのも，今日，リベラリズムが直面しているのはリベラリズムそれ自体を敵視する反啓蒙主義の思想だからである。バイデン

16）　Salman Ahmed and Rozlyn Engel eds., “Making U.S. Foreign Policy Work Better for the Middle Class,” Carnegie Endowment for International Peace, September 23, 2020; Jeff D. Colgan, “Three Visions of International Order,” *The Washington Quarterly*, 42:2, 2019

17）　Daniel Deudney, G. John Ikenberry, “The Intellectual Foundations of the Biden Revolution,” *Foreign Policy*, July 2, 2021

18）　藤木剛康「中間層外交はナラティブたりうるか――新型コロナウイルス感染拡大とアメリカ外交の再構築」『和歌山大学経済学会研究年報』25，2021 年。

19）　アイケンベリー前掲書，41～47ページ。

20）　Adam S. Posen, “The Price of Nostalgia: America’s Self-Defeating Economic Retreat,” *Foreign Affairs*, May/June 2021

21）　ジェームズ・ショフ「「中間層のための外交」とは何か――「トランプ主義」の影つきまとうバイデン政権」『外交』68，2021 年 7・8 月号。

政権もアイケンベリーも，リベラリズムを「試行錯誤を許容する取り組み」として再定義し，経済格差やアメリカの対外関与の「縮小」といった課題に実践的に取り組むことで政治的多数派を形成しようと考えている。しかし，アメリカ第一主義のような反自由主義・反啓蒙主義の運動の背景にあるのは経済的不平等だけではなく，むしろ伝統的生活の解体による存在論的不安である。アイケンベリーによるリベラリズムの見直しや再定義は，経済的不平等の問題を越えて，合理化や近代化を進めるリベラリズムそれ自体への批判にも対応しなければならないのではないか[22)]。

【7】おわりに

アイケンベリーは「リベラルな国際秩序の危機」に対し，秩序そのものではなく，秩序を生み出し支えてきた思想・運動であるリベラルな国際主義に注目し，それが「近代性の生み出す問題に対処する試行錯誤の取り組み」だと定義してその歴史的役割を整理し，リベラルな国際主義の今後の展望を見出そうとした。アイケンベリーによれば，今日のリベラルな国際秩序の危機は外敵によるカー的危機ではなく，近代性のもたらすポラニー的危機であり，中国の台頭に対してもそれを「自由主義なき資本主義」というもう一つの近代化プロジェクトだと捉え，中国への反撃よりも開放的で自由な社会のインフラ再建を優先すべきであるとする[23)]。このようなアイケンベリーの提起はバイデン政権にも概ね受け入れられており，政権の対中政策の論理は①（自国への）投資，②同盟国・友好国との連携，③中国との管理された競争，という組み立てになっている[24)]。

アイケンベリーは政治思想や運動という曖昧で融通無碍なものに焦点を当てることで，一見すると強靱な議論を展開することに成功した。それは融通無碍であるがゆえに，現実の政治の場での失敗を許容し，多様で幅広い政治連合の結集に向けた指針になるのかもしれない。他方で，曖昧であるがゆえに，リベラリズムそれ自体に対する批判を看過しがちである。アイケンベリーは，今日の自由主義秩序の危機は近代性の展開によるポラニー的危機だとするが，その具体的な内容は経済的不安や不平等の問題を中心にしており，実はポラニーが指摘する文化的環境の破壊による存在論的不安の問題を軽視している。こうしたリベラリズムに対する非合理主義的反発への鈍感さは，現実の政治や外交の場でどのような結果をもたらすのだろうか。歴史は弧を描くのか，それとも綾をなすのだろうか。

22） “Review by Mark L. Haas,” *H-Diplo Roundtable*, 23:3, 2021; “Review by M. J. Peterson,” *ibid*.

23） G. John Ikenberry, “The future of liberal democracy: A conversation with G. John Ikenberry,” Brookings Institution, January 4, 2021

24） Antony J. Blinken, Secretary of State, “The Administration’s Approach to the People’s Republic of China,” May 26, 2022